

むかし、あるところに、太郎作という男の子が、お母さんとふたりで暮らしていました。

あるとき、お母さんが重い病氣にかかりました。すると、隣のおばあさんが、「太郎作や。このままだとおまえのお母さんは一週間もせんうちに死んでしまうぞ。何か薬を飲ませんといかん」といいました。太郎作が、

「どんな薬を飲ませたら治るだろうか」ときくと、おばあさんはいいました。

「犬神山のてっぺんに、金の夕顔がさいておる。その花を有明月の晩に取って来て飲めば、病氣は治る。ちょうど今日は有明月だから、すぐに行つてこい」

「そんなら行つてくるから、おばあさん、お母さんを見ていてください」

太郎作は、わらじをはいて、急いで犬神山へ出かけて行きました。

ずいぶん山を登つていくと、いきなり大きなおおかみが出てきて、太郎作に近づいてきました。太郎作は、大きな声で、

「こら、来るな。わしは、お母さんの病氣を治すために薬を取りに行くんだから。来るな」といいました。けれども、おおかみは、そばへそばへと寄ってきます。太郎作は、逃げようとして、あわてて転んでしまいました。太郎作が、岩に寄りかかつて、

「どうとでもしろ」と思っていると、おおかみは、太郎作の鼻先まで来て、大きな口を開けました。そのとき、月があがつて来て、あたりが明るくなりました。すると、おおかみの喉（のど）のおくに、なにやらとがったものが見えました。太郎作は、

「そうか。とげを取つてくれというんだな」と気がつきました。そして、おおかみの口の中に恐ごわ手をつつこんで、とげを抜いてやりました。おおかみは嬉しそうに走つて行つてしまいました。

太郎作は、また山を登つて行きました。しばらく行くと、さっきのおおかみが現れました。おおかみは、太郎作の着物のはしをくわえて、引つ張つていこうとしました。

「こら、引つ張るな。なんで引つ張る」

太郎作は逃げようとしたが、おおかみは、谷のくぼ地まで、太郎作を引つ張つていきました。そして、太郎作をほら穴に押し込み、自分のかげになるようにして、太郎作を隠しました。

じきに、ドドン、ドドンと山鳴りがして、なにやら大きなものが飛んでいくような音がしました。太郎作は、

「犬神山じゃ、月の明るい晩に、千匹のおおかみを通ると聞いたことがあるぞ。千匹のおかみに出会った者は、神さまでも人間でも取つて食われるそうだ。それかもしれない」と思いました。

山鳴りは、ドドン、ドドンとしばらく鳴っていました。やがて静かになりました。すると、おおかみは、太郎作をほら穴から引つ張り出してくれました。

太郎作は、また、一生懸命山を登つて行きました。山のてっぺんに着くと、金色の夕顔の花がいっぱい咲いていました。太郎作は、夢中で花をつんでふところに入れ、とつとつとつと、山を下りました。

明け方、家に帰り着いて、急いで夕顔の花をせんじてお母さんに飲ませました。

お母さんは、一杯飲めば一杯だけ元気になりました。太郎作は、
「あとは、うまいものをどつきり食べれば、すっかり元気になるんだけどなあ」と、
ひとりごとをいいました。

その晩遅く、戸をトタン、トタンたたく者がいます。開けてみると、犬神山のお
おかみがいました。

「おまえ、何しに来たんのだ」

素晴らしいながら、足元を見ると、大きないのししが置いてありました。

太郎作は、いのししを煮て、お母さんに食べさせました。お母さんは、すっかり
元気になって、長生きしたということです。

昔こつぷり。

* 有明月 十六夜から二十九夜の月。

原話…『中国山地の昔話』稲田浩二・立石憲利編／三省堂
再話…村上郁